

本山コレクションから見る本山彦一の交友関係

渡邊 貴亮

関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程

1 はじめに

周知のように、関西大学博物館には、明治後半から昭和初めに大阪毎日新聞社の社長を務めた本山彦一が蒐集した本山彦一蒐集考古資料、通称「本山コレクション」(以下本山コレクションとする。)が所蔵されており、江戸時代の神代石や神田孝平旧蔵資料など明治期の考古学・人類学の学史的資料が含まれることで注目される。

本山コレクションは、本山自身が蒐集・発掘した資料の他、自身の持つ膨大な人的交流より入手した資料が数多く含まれている。これまでも、本山コレクションの来歴を検討した研究はおこなわれてきているが(角田 1980 関西大学博物館 2010、2011 山口 2011 徳田 2013 渡邊 2018 など)、そのほとんどは神田孝平との関係や、木内石亭、木村兼葭堂由来の資料の検討と、むしろ江戸時代から明治初頭にかけての資料の来歴や人的交流が主な着目点となっている。

しかし、本山彦一は大正期から昭和初期にかけて精力的に考古資料を蒐集しており、この時期の本山を再評価するためには、本山自身が寄贈を受けた人物の解明が喫緊の課題である。そこで、本稿では本山コレクションの最も基本的な資料となる『本山考古室要録』をもとに、そこへ記載されている人物名の解明を試みた。以下ではその成果について報告する。

なお、本稿では煩雑さを避けるために本山コレクションの各資料に対する呼称は、「MY-S0987」といった様に『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』(関西大学博物館 2010)に則り記載する。前述のMY-S0987であれば『本山考古室要録』では「第Ⅶ函九八七弥生式土器破片」となる。

2 資料寄贈者氏名

前項で述べたように、『本山考古室要録』に記載のある人物名について検討を行った結果を述べる。ただし、すべての人名に対して詳細が判明してはならず、一部は今後の課題となっている。ここでは、検討した人名について、現状で判明している事実を報告しておく。(表1)

青山六朗(青山禄朗)

株式会社藤倉電線(現 株式会社フジクラ)の社員。桜内幸雄、高岩勘次郎らとともに支那工業会社を設立する。また、青山は橋本増治郎と快進社自動車工場(後の株式会社快進社、日産自動車)を後援する。1913(大正2)年に橋本は小型乗用車を製造するようになるが、その車は青山の他に田、竹内を加えた後援者3名の頭文字をあてたDAT号と名付けられた。この車は現在のダットサンの原型となる車である。

赤坂清七

大阪毎日新聞で論説委員や主筆、編集局顧問などを務めた。

東輝文

児島湾開墾地事務所員 (佐々木・藤原 1905)。また、『古今雅俗東海鉄道名所記』を著す。周知のように、本山彦一は藤田組支配人として児島湾干拓事業を行っており、その時の関係者であろう。

有馬七蔵

宮崎県延岡市地域を中心に活動した考古遺物蒐集家。そのコレクションは数千点を超すものとして良く知られていたが、そのほとんどは 1945 年に戦災で焼失した。本山コレクションの中には有馬氏寄贈の資料が含まれており、戦前に本山氏に寄贈されたため戦禍を逃れた。

飯田熊次郎

熊次郎のほか、飯田宇宙、宇宙学人の名で『恋之夜暴風：自由結婚断』『薩長同盟記』『徳川世紀：評論』などを著す。『徳川世紀：評論』については、飯田宇宙君著述、山岡鉄舟君題字、板垣如雲君及諸名士合評、伊賀倉・内田両先生序文となっている。如雲は板倉退助の号であり、序文の伊賀倉は伊加倉源四郎俊貞のことであろう。

宇野忠吾

熊本県大津町 (現 大津市) の町長を務める。後述するように、本山彦一は自身の出身地である九州島、特に熊本県の資料蒐集や研究者への援助を積極的に行っている。その最も象徴的な人物が坂本経堯であろう。その坂本が拠点としていたのが大津町であることから、そのつながりは想像に難くない。また、宇野は農業改革にも積極的に取り組むとともに、地方改良運動・農村更生運動に影響を与えた中央報徳会の機関紙『斯民』の発刊にも関わっている。これらの活動や思想からも本山との関連を窺うことができる。

梅原末治

考古学者・歴史学者。京都帝国大学考古学講座を濱田耕作より引き継ぐ。周知のように、本山は濱田をはじめ京都帝国大学の考古学者と関係が深く、梅原との関係もその流れで理解できよう。

尾島静雄

大阪毎日新聞社記者。雑誌『朝鮮』81号に「白頭山探検記」を執筆しており、朝鮮半島との関連が窺える。寄贈資料が朝鮮半島の資料であることから、尾島は大阪毎日新聞社から現地へ派遣された記者の一人であろう。

小原敏丸

維新史研究者・小説家。流泉小史の名で執筆活動を行う。『臺灣総督府及所属官署職員録』に総督官房秘書課嘱託として記載されるため、臺灣へも赴いているようである。出身は岩手県であり、寄贈資料もまたすべて陸奥国蒐集の資料である。

加賀谷市三

1905 (明治 38) 年に加賀谷新聞店 (現 有限会社加賀谷新聞店) を創業。創業当初は東京日日新聞 (現 毎日新聞) の販売代理店であったことから、本山との関係をかいま見ることができる。また、後には秋田魁新報専売となるが、同誌で長らく主筆を務めたのが犬養毅であった。犬養と本山の関係についての詳細は既報に譲る (渡邊 2018)。

門井氏

門井八郎のことか。ただし本人である確証はなく、現在でも下妻一帯には門井姓が多い。資料採集場所として陸奥国真壁郡上妻村渋井門井氏邸内とある。門井八郎は茨城県下妻市渋井出身の作詞家である。元新聞記者である長谷川伸の門下生として小説を学んでおり、本山と何らかのつながりがあったのかもしれない。

金澤葵園

人名かどうかの判断が困難である。加賀藩本多家の旧家臣により設立された「葵園会」の可能性がある。葵園会は、加賀藩家老の本多家当主本多政均が1869（明治2）年に暗殺され、その敵討ちを決行した義士の追悼法会を行っている。また、『本多政均関係文書』には、明治から大正にかけて作成された葵園会宛の文書が多く残っているが、「本多家邸内葵園会」や「本多政以邸内葵園会」「本多男爵邸内葵園会」などと書かれており、本多家との関りが強くみられる。

年代を考えれば本多政以か息子の本多政樹であろうか。本多政以は本多家12代当主であり、葵製糸場を創業したほか石川県農工銀行頭取を務める。男爵。貴族院議員。また、政以は白院書院にて藤澤南岳から学んでいることも（横山2016）、本学資料と関連して興味深い。その息子政樹も貴族院男爵議員。男爵。金沢商業会議所顧問、森田染工場取締役、丸文機業場代表取締役、加州銀行取締役、内国貯金銀行重役などを務める。

金森豊造

金森豊造のほか金森椿人としても活動した、俳人・ジャーナリスト。『句集 紅椿』などを著す。

小池奥吉

『北鮮太古の石器』などを著す。朝鮮半島における最も早い日本人書店（日比2014）といわれた「会寧博文館」館主。早くに朝鮮半島にわたり、書店を経営するかたわら、蒐集した資料を広く寄贈したようである（宮里2010）。本山への寄贈資料もすべて朝鮮半島の資料である。小池寄贈の朝鮮半島関係資料は他に東京国立博物館や東洋民俗博物館などにも収蔵されている。小池は、自身が蒐集した資料を絵葉書にもしており、「朝鮮会寧ヨリ発見ノ石器ト土器（考古史学資料）小池奥吉秘蔵ノ一部」として発行している。徳富蘇峰宛の書簡にも名前が見られることから、多くの知識人との交流が想定される。

後藤與作

四三九、壺中庵などとも称したようである。新潟県佐渡の郷土史家。佐渡農学校講師なども務める。『佐渡政党史稿』に「後藤與作等の新党樹立」などの記録が残る。東京日日新聞主催の「佐渡郡郷土座談会」に名前が残っており、あるいはこれらの縁で本山と交流があったのかもしれない。本山への寄贈資料はすべて佐渡の資料である。

小西元

長崎県五島の郷土史家。郷里五島列島の遺跡について詳細な踏査と資料蒐集につとめた。特に縄文時代のいわゆる「石鋸」が遺された遺跡について踏査を繰り返しており、当地の基礎的な資料の蓄積と「石鋸」研究の推進に貢献した。本山への寄贈資料についても五島の石鋸である。まったく

同様の出土地を記した資料が、小西氏の寄贈品として東京国立博物館に収蔵されていることから、珍しい資料を所有しているとしても知られていたようである。

西郷藤八

静岡県を中心に活動した郷土史家。遠江の遺跡や遺物について、『考古雑誌』上で紹介している。「遠江国寺谷銚子塚古墳調査報告」「遠江国長谷発見の銅鐸に就いて」「遠江国堀越海蔵寺の古鏡」「遠江国小笠郡に於ける石棒分布」「遠江国における二三の金石文に就いて」など多数を著すほか、『遠州郷土読本』などへも寄稿する。また、同郷の鷲山恭平らとともに報徳運動や農村復興運動も積極的に推進した。あるいは本山とのつながりは、こちらであろうか。

坂本經堯

熊本県菊池郡泗水町住吉に所在する日吉山王神社の祠官であるとともに、昭和年間を代表する考古学者。熊本の地に生まれ、郷土の歴史解明に生涯をついやす。坂本が本山彦一の知遇を得たのは1936年であった。本山は郷土の九州で研究を続ける坂本と意気投合し、すぐさま研究への支援を申し出た。その支援によって実施された発掘調査の一部が熊本県の三万田遺跡や桑鶴遺跡などの調査となっている。坂本は調査終了後、出土資料の一部を本山のもとへ送っており、坂本の死後に自筆ノートがまとめられた『肥後上代文化資料集成』の中にも「現品本山考古館」の文字が見てとれる。

佐野英山

古物商。主に古銭売買を専門とする。周知のように、本山は古銭の蒐集家であり佐野との関係は当然といえよう。佐野は羅振玉のコレクションも取りあつかっている。旧稿では本山コレクションに含まれる中国の石鉞について、羅振玉の資料である可能性を検討したが（渡邊2018）、あるいは佐野も関係しているかもしれない。また、本山は佐野に依頼して和同開珎の銭范を発掘しており、本山は自ら三大発掘の一つに数えている。なお、佐野は久原房之介とも取引していた記録が残されているが、久原は藤田組創業家の家系であり（父が藤田傳三郎と共に藤田組を創業）、慶應義塾において福澤諭吉に学んでいることから、本山との関連は深い。

茂野幽考

九州、琉球諸島の民俗・歴史・文化について『南島今昔物語』『奄美大島民族史』『嶋の西郷と愛加那』『南日本切支丹史』『大島紬の染と織』など多くの書物を著す。徳富蘇峰との書簡がみつかり、あるいはそのような関係で本山との繋がりがあったのかもしれない。

本山への寄贈資料も奄美大島の資料である。

尚義館旧蔵資料

国立公文書館デジタルアーカイブに昭和5年5月25日付で『財団法人尚義館解散許可』が文部省より出されている。

鈴木貞吉

郷土史家。『考古学雑誌』上に「猿澤川筋大洞窟遺跡発見に就いて」「石器時代の假面」『岩手縣三大川に據る古墳群概略に就て』などを著す。『遺跡地名表』などにも名前がみられ、大正年間に東北地方を中心に調査を進めたようである。

鈴木貞太郎

仏教学者・仏教哲学者の鈴木大拙の本名であることから、鈴木大拙のことであろうか。記録には、「鈴木貞太郎氏同行」とあるため、おそらく本山と共に遺跡に赴き、共に資料を採集したのであろう。本山との交流の経緯は定かではないが、鈴木の後援者には貴族院議員・大阪商工会議所会頭などを歴任した安宅弥吉がおり、あるいは安宅を介した交流があったのかもしれない。

須田正雄

文洋社発行の新譯國文叢書シリーズにおいて『保元物語平治物語』『曾我物語』『枕草子』の編著を担当する。同シリーズには文学士として紹介されている。1912（明治15年）年1月11日に発せられた官報第8565号においては、叙任及び辞令の欄にて「新潟県長岡女子師範学校教諭」と記載されており、同一人物かもしれない。

曾我鍛

新聞記者・郷土史家。『正岡子規伝』『井上要翁伝』などを著す。伊予日日新聞主筆や大阪毎日新聞松山通信部主任、松山支局長を務めた。『伊予史談』『予陽叢書』などの編集も手がけた。愛知県出身であり、本山に寄贈した資料にも伊予の資料である。

田澤金吾

『薩摩焼の研究』『鞍馬寺経塚遺宝』『古瓦』『楽浪』などを著す。兵庫県西宮市出身であり、紅野芳男や吉井良尚らとともに「西宮史談会」を興す。内務省・文部省・東京帝国大学・国立博物館などの囑託として史蹟や名勝、美術品の調査などを手がける。昭和20年代には文部技官として国立博物館調査課に配属される。その後は文化財保護委員会や文化財専門審議会の委員などを務めた。本山への寄贈品も出身地付近の淡路・摂津の資料である。

永澤小兵衛

『遠刈温泉誌』『宮城県鉱泉誌』『青根温泉志』『陸前国玉造郡温泉村八湯志』などを著す。主に温泉・鉱泉を専門とし、蓑笠学人の名を用いる場合もある。

中島秀雄

本山彦一の秘書、大阪毎日新聞社員。本山と同様に熊本県の出身であり、後に大阪毎日新聞福岡支局長も務めた。徳富蘇峰との書簡なども残されており、歴史にも造詣が深く、『大佐賀市論』を著したほか、新聞紙上で菊池城の推定跡地などについても論じている。一時期、坂本経亮とともに菊池城推定跡地の確認に注力しており、寄贈資料についてもその調査の折に入手した資料の可能性が高い。

中瀬清司

熊本県大津町の町長を務めた。『大津弘報』通巻64号には、酪農大学と題して北海道へ農業研修に向かう町議団の研修団長を務めている。また、中瀬が町長を務めている期間の『大津弘報』誌では、頻繁に農業関係の記事が掲載されており、熊本での農業振興事業の推進など、本山との思想的な関係が指摘できる。

中山平次郎

九州大学名誉教授。大正から昭和年間を代表する医学博士、考古学者。特に博多湾の総合的研究、大宰府の研究、志賀島出土金印の研究、弥生文化の研究について多大な功績を残しており、博多湾の総合的研究では西日本文化賞を受賞した。中山は弥生時代や弥生文化という概念が確立していなかった大正年間に、縄文時代と古墳時代の「中間期」（弥生時代）を設定・提唱し、研究を推進した。岩崎・竹下の炭化米を例に「中間期」の生活基盤が水稻耕作に変化していることや、今山における石斧製作と流通を検討し、その社会構造の解明を試みている。

本山コレクションには、福岡県八女市岩崎出土の炭化米資料が含まれている。寄贈者の氏名が記載されていないが、中山の寄贈資料の可能性が極めて高い資料であることも注目される。

西村眞琴

生物学者。マリモの研究などをすすめて、北海道大学教授を務めた。そのほか、ヒト形のロボット「學天則」を作成したことなどが知られる。西村は1926（大正15）年に大阪毎日新聞社・東京日日新聞社共同の懸賞論文「五十年後の太平洋」に応募して選外佳作となっており、1927（昭和2）年には北海道大学を退職後に大阪毎日新聞に入社している。

沼田頼輔

歴史学者、紋章学者。神奈川県に生まれ、神奈川県立師範学校に学び、小学校訓導を務める。その後も日本各地の校長を歴任する傍ら、山内家史編纂所主任となり、紋章学の研究を進め、帝国学士院恩賜賞を受賞した。そのほか考古学会副会長のほか人類学会、集古会幹事などを歴任した。

花岡敏隆

明治から大正期にかけての新聞記者・ジャーナリスト。大阪毎日新聞社に入社後、京都支局長・神戸市局長を歴任後、東京日日新聞社経済部長を務める。本山の発行した『エコノミスト』編集長を務めた。花岡は慶應義塾を卒業しており、慶應義塾から大阪毎日新聞社への経歴は本山と共通するものがある。

藤井節太郎

政治家、新聞記者。兵庫県西脇市黒田庄喜多の出身。寄贈品も黒田庄喜多の資料である。藤井は黒田庄役場に勤務後、新聞通信員となる。その後は新聞販売業を営みながら、丹陽新聞の編集顧問を務める。昭和年代には、柏原町議会議員、柏原町長、兵庫県会議員なども務める。本山との交流は新聞や政治を通してであろうか。

前田竹房齋

大阪府堺市出身の竹工芸師。大正年間には皇族である北白川宮への献上品を作成したほか、皇室の外交時の贈答品となる作品を国に納めるなどした。息子で二代目竹房齋は重要無形文化財「竹工芸」保持者に認定されたことから、その高い技術が窺える。寄贈資料は出身地である堺市の資料である。

村上典吾

福岡日日新聞熊本支局主幹を務めた。『今世名家文鈔』を編するほか『肥後の菊池氏』では序文

を著している。

森丑之助

人類学者、台湾研究者。京都に生まれ、長崎商業学校において中国語を学んだ後に台湾に駐屯する陸軍通訳として台湾守備隊付となる。その後は台湾総督府嘱託として先住民の調査にあたり、1916（大正5）年には台湾博物館主事となる。鳥居龍蔵とも親交があり、1925（大正13）年には大阪毎日新聞社の嘱託となっている。

山本竟山

本名は山本由定。書家。日下部鳴鶴に師事し、楊守敬や呉昌碩らとも交流があった。明治時代末には居を京都へ移し、関西においても多くの文人墨客と交流した。その中には、内藤湖南、富岡鉄斎、長尾雨山、羅振玉らの名が見られる。師の日下部鳴鶴は楊守敬との親交も深く、山本竟山自身も中国へ遊学の際には楊守敬を訪問するなど深い親交を伺うことができる。1913（大正2）年の大正癸丑蘭亭会、山本竟山と本山彦一が共に出品している。また、第2回目にあたる1917年の大正丙辰寿蘇会には山本竟山と本山彦一が出席した形跡がある。さらに、1922年の赤壁会では発起人の名前の中に山本竟山と本山彦一の名前がみとれる。山本竟山とその寄贈資料についての詳細は旧稿（渡邊2018）を参照されたい。

横山健堂

人物評論家、ジャーナリスト。本名は横山達三。健堂のほか黒頭巾や火山楼の名も用いた。『初等帝国史』『教育史余材』『現代人物競』『日本近世教育史』『新人国記』『人物と事業』『石雲録』など多数を著す。のちに駒澤大学教授を務める。横山は山口県出身であり、寄贈資料も山口の資料である。

吉岡憲

画家、独立美術協会会員。本名は吉岡佑晴。川端画学校で学び、満州の聖聖ウラジミール専門学校を卒業する。年代的には吉岡が満州で滞在中に本山が満州へ渡っている可能性が高いが詳細は不明である。

和田千吉

考古学者。『日本遺蹟遺物図譜』などを著す。

石亭より吞叢和尚へ

本山コレクションに関連する人物で「石亭」といえば、木内石亭であろうが、年代が合致せずに確証に欠く。石亭から木村兼葭堂へ譲られ、その後神田孝平を経由した旨が記されているのかもしれないが、詳細は不明である。

鳥居龍蔵が大正6年8月に記した調査記録に「石亭」の文字がみられるため、こちらの人物の可能性が高いが、詳細は不明である。

3 まとめ

ここまで見てきたように、本山と寄贈者の関係は一様なものではない。大阪毎日新聞社の関係者が多い事実は指摘できるが、そのほかにも多様な関係が見て取れる。特に、研究者以外からの寄贈資料の多さに着目すべきであろう。梅原末治や和田千吉のように考古学・歴史学において著名な人物のみでなく、新聞記者や地元郷土史家、画家、書家、竹工芸師、実業家、政治家などが含まれるリストは、本山の交流の広さを如実にあらわしている。また、自身の出身地である九州の人脈や、児島湾開墾事業の際にかかわった人物、農業振興といった思想的共通性がみられる人物が含まれるなど、本山自身の歩んだ足跡もまた、この資料からは看取できよう。

これまで、本山コレクションは日本考古学黎明期を検討するうえで貴重な資料であると評価されてきたが、本稿では、本山コレクションにはその蒐集者である本山彦一の私的・公的な交流の情報をも内包するコレクションであると再評価することができた。大正期・昭和期における「なにわ大阪」の発展を担った本山彦一の交流関係を把握することは、日本考古学黎明期の研究者間の交流を明らかにするにとどまらず、研究者と財界や政界、経済界との繋がりを明らかにする一端ともなる。そのつながりが明らかとなれば、当時の研究構造や社会構造、人的交流による資料の移動などが、より高解像で復元することが可能となる見通しを持つ。本稿がその一助となれば望外の喜びである。

本稿で取り扱った人物は、筆者が本山考古室要録や本山コレクションそのものに記載されている人物名から推測したものである。よって、これらの人物が寄贈者と異なる可能性も十分にある。その責は全て筆者の負うところである。また、本山考古資料を実見すると、『本山考古室要録』の備考に記載のない氏名が注記されていることも少なくない。それらのほとんどは、別の資料の備考に記載のあるものであるが、今後未記載の氏名が見つかる可能性も残されている。実資料を熟覧しての検討は今後の課題である。

また、本稿にて取り扱う内容は、その性格から膨大な量の参考文献を用いた。その一つ一つを列挙するには紙面が到底足りないため今回は省略した。どうかご寛恕願いたい。

謝辞 本稿は、筆者がおこなっている本山彦一蒐集考古学資料の再整理に伴い、個人的に調べ始めた記録ノートが契機となっている。末筆ながら、未完成のその資料について公表する機会を与えて下さった関西大学文学部米田文孝先生と関西大学博物館山口卓也先生に心よりお礼申し上げます。

表1 本山考古室要録に記載のある氏名一覧(1/2)

記載氏名	寄贈(所蔵)資料番号	備考
青木・鈴木両氏	MY-S0654, MY-S0659	青木禎次郎と鈴木貞吉か
青木禎次郎	MY-S0458	
青木氏	MY-S0166	
青山六朗	MY-S0156, MY-S0849	実業家
赤坂清七	MY-S1080	大阪毎日新聞主筆
東輝文	MY-S0958, MY-S0976	児島湾開墾事業関係者
有馬七蔵	MY-S1071, MY-S1072	考古資料蒐集家
飯田熊次郎	MY-S0883	作家
池田氏	MY-S0844	
伊藤氏	MY-S0809	
井上祐治	MY-S1136	
井上氏	MY-W3043, MY-W3044	
上野氏	MY-S1180	
宇野忠吾	MY-S1037	熊本県大津町長
梅原末治	MY-W3001, MY-W3039	考古学者
江崎氏	MY-S0460	
大塚典治	MY-S1038	
尾島静雄	MY-K2346	大阪毎日新聞記者
小原敏丸	MY-S0641, MY-S0645	維新史研究家、小説家
加賀屋市三	MY-S0729	加賀谷新聞店創業
加藤氏	MY-K2268	
門井氏	MY-S0793	門井八郎のことか
金澤葵園	MY-K2188, MY-K2189	葵園会のことか
金森豊造	MY-S0894	俳人、ジャーナリスト
可児正司	MY-S0874	可児は地名か?
小池奥吉	MY-S1213, MY-S1214, MY-S1215	朝鮮半島会寧博文館主
後藤與作	MY-S0838	郷土史家
後藤氏	MY-S009, MY-S0836, MY-S0840	後藤與作のことか
小西元	MY-S1014	郷土史家、考古資料蒐集家
小室氏	MY-W3030	
西郷藤八	MY-S0770	郷土史家
坂本経堯	MY-S1020~1035, MY-S1039~1061, MY-S1063~MY-S1070,	考古学者
佐野英山	MY-S0312	古銭・古物商
澤村常夫	MY-S1297	
茂野幽考	MY-S1089	歴史民俗研究家
品川義分	MY-S1132	
松陰堂	MY-S0634	本山彦一のことか
尚義館旧蔵	MY-K0069	財団法人尚義館のことか
杉本忠行	MY-S0205	
鈴木源助	MY-K2037, MY-K2038	
鈴木貞吉	MY-S0221, MY-S0305, MY-S0509	郷土史家
鈴木貞太郎	MY-S0779	鈴木大拙
鈴木氏	MY-S0678	鈴木貞太郎のことか
須田正雄	MY-S1067	文学士
曾我鍛	MY-K2232, MY-K2241, MY-K2256	新聞記者、郷土史家
高木新助	MY-S1184	

表1 本山考古室要録に記載のある氏名一覧(2/2)

記載氏名	寄贈(所蔵)資料番号	備考
高橋氏	MY-S0459	高橋義雄と関係あるか
田崎則壽	MY-S1082	
田澤金吾	MY-K2126	文部技官
田澤氏	MY-S0910, MY-K2163	田澤金吾のことか
堂野	MY-S0797, MY-S0798	「堂野発掘」の記載 地名か
中川松吉	MY-S0223	
永澤小三郎	MY-S1104	
永澤小兵衛	MY-K2169	温泉、鉱泉研究者
中島秀雄	MY-S0995, MY-S1036, MY-S0048	本山彦一秘書 大阪毎日新聞社員
中島秀継	MY-K2316	中島秀雄の親族か
中瀬清司	MY-S1062	熊本県大津町長
九大中山博士	MY-S1006	中山平次郎
西林氏	MY-S1210	
西村眞琴	MY-K2366	生物学者
西村氏	MY-S1272, MY-K2348	西村眞琴のことか
沼田頼輔	MY-S0784	歴史学者、紋章学者
橋口氏	MY-S1015, MY-S1016, MY-S1017, MY-S1018	橋口良吉のことか
畑野徳二郎	MY-S1117	
花岡敏隆	MY-W3042, MY-W3058	新聞記者、ジャーナリスト
平井孫一	MY-K2275	
藤井節太郎	MY-K2251	政治家、新聞記者
前田竹房齋	MY-K2270	竹工芸師
前田氏	MY-K2282	前田竹房齋のことか
松野氏	MY-S1226	
宮原敦	MY-S1166, MY-S1167	
村上典吾	MY-S1109	福岡日日新聞熊本支局主幹
村瀬秀二	MY-W3061	
本山松陰	MY-S1217	本山彦一
森本氏	MY-S1202	
森氏	MY-S1171, MY-S1175, MY-S1176, MY-S1177, MY-S1178, MY-S1179, MY-S1204	森丑之助 人類学者、台湾研究者
柳原氏	MY-S0989	
矢野眞枝	MY-K2014	
矢野氏	MY-K2015, MY-K2016	矢野眞枝のことか
矢吹氏	MY-K2026, MY-K2035(2024~2035 全て?)	
山口政	MY-S1124	
山本竟山	MY-K2359	書家
山本昌三	MY-S0635	
要田氏	MY-K2223	
横山健堂	MY-K2047	人物評論家、ジャーナリスト
吉勇弘	MY-S1090	
吉岡憲	MY-S1137	
吉野氏	MY-S0454	
和田博士	MY-K2054	和田千吉 考古学者
石亭より吞叢和尚へ	MY-S0225	